



TITLE:

# 封建制度と紀年法

AUTHOR(S):

藤田, 至善

---

CITATION:

藤田, 至善. 封建制度と紀年法. 東洋史研究 1936, 2(1): 14-14

ISSUE DATE:

1936-10-13

URL:

<https://doi.org/10.14989/145574>

RIGHT:

## 封建制度と紀年法

尙書堯典に「乃命羲和、欽若昊天曆象日月星辰、敬授人時。」とあり、洪範に「五紀、一曰歲、二曰月、三曰日、四曰星辰、五曰曆數。」とある如く、古來君主の重大なる任務として、曆を制定することがある。故に紀年の法がこの曆を作つた君主の即位の年を以て元年とし、それより二年、三年と數へて行くことは極めて自然のことである。所謂正朔を奉ずるとはこのことである。

周代は封建制度の行はれた時であり、諸侯は各々その封國に於て、各々その即位をもととした紀年法を持つてゐた。これは趙翼も既に陔余叢考（卷二、春秋紀年）に於て指摘してゐる。

支那古典籍にこの紀年法を以て歴史を記してゐるのは春秋と舊本の竹書紀年である。

**注** 現行の竹書紀年は周をもととした紀年であるが、史記索隱に引用せられた舊本の竹書紀年は魏をもととした紀年法であつた。例へば史記魏世家の「武侯卒。」を索隱に「紀年云、武侯二十六年卒。」とある。これは史記六國表と合はぬが、兎に角、魏をもととした紀年法のあつたことを知るのである。

若し晉の乘、楚の檮杌存すれば又必ず斯の如き紀年法を用ひたであらうことは、顧炎武（日知錄卷二十、年號當實書）の論じた如くである。而して春秋時代實際にこの諸侯各自の紀年法が行はれてゐたことは、左傳文公十七年、襄公二十二年によつて知られる。降つて漢代にも斯る紀年法があつたことは、趙翼（二十二史劄記卷二）顧炎武（日知錄卷二十）が指摘した如くである。

故に司馬遷は史記に周・漢をもととした年表を作つて、これを封建諸侯各自の紀年法と對照させてゐる。十二諸侯年表、六國表、漢興以來諸侯年表等これである。

（藤田至善）